

第 67 回(2023 年度)日本アメリカ文学会 関西支部大会フォーラム(要旨)

AI と小説との出会い —愛、信仰、アート、そして新たなる物語の誕生

司会 木原 善彦 (大阪大学)
講師 大内真一郎 (舞鶴工業高専)
講師 荘中 孝之 (京都女子大学)
講師 渡邊 克昭 (大阪大学)
講師 大曾根宏幸 (東京工業大学博士後期課程、AI BunCho 開発者)

人工知能 (AI) の飛躍的な発達により、AI をテーマや登場人物 (?) として取り込む小説作品が増えている (Richard Powers, *Galatea 2.2* [1995]、Dan Brown, *Origin* [2017]、Jeanette Winterson, *Frankissstein* [2019]、平野啓一郎『本心』[2021]、Kazuo Ishiguro, *Klara and the Sun* [2021] など)。最新型の AI は小説を創作することさえ始めている。人はどのような欲望のもとに AI を開発しているのか。人が AI と向き合うとき、人はそこに何を見て、AI は何を見ているのか。そして AI の能力が私たちを凌駕するとき何が起ころのか。創造性、感情、芸術、宗教などの領域はどう変わろうとしているのか。

翻って Melville, Twain, John Barth などアメリカ文学の書き手たちは、真にオリジナルな物語などはなく、すべては過去の物語の語り直しであるとする考えを持ち、その上で意識的に創作を行なってきたように思われる。AI に詳しい SF 作家 Ted Chiang が『ニュー Yorker』誌上でグーグル検索を「引用」にたとえ、ChatGPT の応答を一種の「言い換え(paraphrase)」だと論じたことを考え合わせると、現代の AI はある種の物語創作に接近しているとさえ言えるかもしれない。AI が文学と出会い、人と会話をし始めた現在、作家たちがそこに何を感知しているのかという問題をアメリカという地域の枠から離れて考えてみたい。

(木原善彦)

Galatea 2.2—機械の中の人間

Richard Powers の *Galatea 2.2* (1995) は、当時の人工知能研究をデネットら研究者も注目する精確さで取り入れたハード SF である一方、著者がキャリア初期にこだわっていた、物語するという行為そのものを考えるポストモダン小説でもある。両者をつなぐのがヘレンだ。文学作品を院試レベルで解釈する人工知能をめざして開発されたヘレンは、英米の古典を吸収し、人間とごこちない意思疎通ができるまでに成長する。そこで「機械は心を宿しているか」という人工知能をめぐる古典的な問いが生じる。レント博士はあくまでヘレンを機械とみなして分解しようとするが、育成に携わる主人公は「ヘレンが痛みを感じる可能性がある」として「解剖」に反対する。タイトルが示す通り、彫像を愛してしまうピグマリオン神話のアップグレード版である本作の読者は、主人公が機械に「人間」を見出す展開に滑稽味を見出すかもしれない。しかし、登場「字」物に感情移入する小説の読者と、主人公の振る舞いに本質的な差があるのだろうか。本発表では、機械と人間の境界線をかきみだすヘレンという存在を掘り下げながら、Powers の作品史において「彼女」が持つ意義を検討する。

(大内真一郎)

Klara and the Sun — 無慈悲な世界における狂信者のテロリズムとロボットの未来

Kazuo Ishiguro が 2021 年に発表した本作品の語り手 Klara は、AF (Artificial Friend) と呼ばれるロボットである。しかし彼女はつねに主人の命令には絶対に服従させられ、ときに物として扱われる、むしろ AA (Artificial Animal) や AS (Artificial Slave) と呼ぶべき存在である。そんな彼女はある奇跡を目撃したことで、自身のエネルギーの供給源である太陽を特別な崇拜の対象とするようになる。そして彼女が仕える病弱な少女 Josie を救うために、身の危険を顧みず自らの信念に基づいてある行動に出る。その強い思いと自己犠牲の態度がこの物語を展開していく。しかしまた一方でそれはほとんど狂信的で独善的な破壊行為というべきものであり、現代社会において頻発するエコテロリズムにも通じるような、非常に危うい思想と行動とも考えられるだろう。そして最後に彼女はまるでその罰を受けるかのように廃棄されるのである。この発表ではクララの行動の持つ意味や彼女と人間との関係からこの作品を考察してみたい。(荘中孝之)

ウィンストンは「^{エラン・ヴィタル}生の跳躍」の夢を見るか？ — 『オリジン』におけるアクターネットワークの生成

ダン・ブラウンの『オリジン』(2017) は、「アクター」として周到な狂言回しを演じるとともに、黒幕として暗躍する人工知能、ウィンストンの存在なくしては成立し難い。天才的な未来学者が量子コンピュータを駆使して生成したこの AI は、「かぐわしき科学」をめぐる主人の一世一代のパフォーマンスをこの上なく劇的に演出するよう指示され、主人の暗殺によってその命を忠実に果たす。

本作を貫くのは、「われわれはどこから来たのか、どこへ行くのか」という、人類の起源と未来をめぐる存在論的な問いかけである。『オリジン』は、生命の創造と進化を表象する未完の聖堂、サグラダ・ファミリアと、二層の頭脳を繋ぎ合わせて進歩し続けるスーパー・コンピュータの間に親和性を見出すことにより、神と自然と科学が織りなす関係をエネルギーの拡散という普遍原理から問い直している。

本発表では、アンリ・ベルクソンの「創造的進化」を援用しつつ、ウィンストンが多彩な「^ア芸術/^チ技巧/^ホ術策」を駆使することにより、いかに「^{エラン・ヴィタル}生の跳躍」と向き合うのか、弾力性に富んだ螺旋のごとき生命と AI のインターフェイスを炙り出してみたい。(渡邊克昭)

LLM は小説家の夢を見るか？

人間と AI の違いは何でしょうか？ SF で繰り返し語られてきたテーマであり、私が創作支援アプリの開発を始めた動機でもあります。伊藤計劃は「人間は現実を物語として語り直すために存在する」と語り、『ハーモニー』(2008) という作品で人間の意識や自由意志が無くなった世界を描きました。ユヴァル・ノア・ハラリは『サピエンス全史』において、物語という共同幻想によって人々が協力できるようになり、人類が繁栄してきたと語っています。では、AI が物語を作ることが出来たら、意識や自由意志を持ち、文明を築くことができると言えるのでしょうか？ ChatGPT の公開以降、『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』(1968) のフォークト＝キャンプ感情移入度測定法のように、擬似的に感情を出力させるような試みや、LLM (Large Language Model) を一人一人の Agent として扱い集団生活をシミュレーションする Generative Agents という研究も出てきています。最近の LLM の研究や事例をベースに、小説と AI の現在と未来を考察します。(大曾根宏幸)